

「たましい」¹が「離されうる」²ことについて

——アリストテレース³における第一の哲学と第二の哲学——

伊藤克巳

アリストテレースの「たましい」*ψυχή* についての考察をめぐっては、近年に至っても、特に心身問題との関連の脈絡で、機能主義的な解釈を中心にして活発な議論がなされてきている⁴。その中でも、「たましい」とソーマ⁵ *σῶμα* [身体] が一つであるとも言い、「たましい」の部分とも他の類とも考えられるヌース⁶ *νοῦς* が、ソーマ [身体] から独立して存在できる、とも言い、矛盾した見解が混在しているのではないか、という議論が論点の一つとなっている。

本稿では、アリストテレースが、様々な機会にしばしば言及している、「たましい」が「離されうる」ことについて語られているテキストに着目し、この見解の混在という論点について、「第一の哲学」と「第二の哲学」の考察領域との関連から、光を当てることを試みることにする。

¹ 「靈魂」、「心」、「魂」、「生魂」(今道.2004)などと訳されてきた *ψυχή* を「やまとことば」の「ひらがな」で「たましい」と訳した。日本語の古語の「たま」と *ψυχή* の意味領域が、重なることも意識しての訳である。また漢語の「魂魄」の「魄」も「たましい」と読み、遊離魂を示す場合もある「魂」よりもむしろ身体に密接にかかわる身体魂を示すその意味合いも強いので、『「たましい」について』の中のかかなりの議論にはむしろこの「魄」の字をあててルビを「たましい」と付けたりすることも考えられるが、ヌースとのかかわりも含めて「魂」の字の方がふさわしい局面も確かにあるので、その意味でも「魂」と「魄」の両方の意味合いを同時に示せるやまとことばの「たましい」という訳語がふさわしいと考えた。

² 「離存する」、「離在する」などと訳されてき *χωριστόν* を「離されうる」と訳した。原語にはない「存」とか「在」とかの「ある」*ἐμί* にかかわる語を入れない方がよい、と考えた。また *χωριστόν* の *-τόν* の部分が、受動的可能性を示す場合があることも考慮した。『「たましい」について』(DA II 2.413b1-414a3)では、*δύναται χωρίζεσθαι* (413b5-6)が *χωριστόν* (413b14) と、また *ἐνδέχεται χωρίζεσθαι* (413b26-27)が *χωριστά* (413b28)と関連して表記されている点も、*-τόν* の部分と可能性や許容性という様相とのかかわりを示していると思われる。

³ ギリシア語の固有名詞や普通名詞の長音は、本稿では省略せずに記すこととする。ギリシア語の固有名詞は特に哲学の分野では長音と短音の区別をしない慣習があるが、「同名性」という問題を考える際に、「同音性」という要素も重要になると考えられるので、「音」の長短が問題になる文学の場合に限らず、哲学の分野でも「音」は可能な限り当時の原音に近いと思われる形で表記した方が古代ギリシアの往時に相応しい、と考えた。

⁴ 代表的な論者を挙げれば、Barnes, J.1971, Shields, C.1990, Burnyeat, M.1992, Sorabji, R.1992, Charles, D.2009, Caston, V.2009, 茶谷.2012, 文.2016などを指摘することができる。

⁵ 「物体」、「身体」と訳されてきた *σῶμα* を、一般に外来語を表記する際に使用する「カタカナ語」で原文の音を写して、「ソーマ」と訳した。日本語には「物体」と「身体」の両者を同時に示す適切な用語がないからである。

⁶ 「理性」、「知性」、「英知」、「直知」と訳されてきた *νοῦς* をカタカナ語でヌースと訳した。すべての意味合いを一語で表現できる適切な訳語がない、と判断したためである。

1

まず「たましい」が「離されうる」ことに言及している箇所から検討してみよう。

T1. 「かくて、「たましい」がソーマ〔身体〕から「離されうる」のではないことは、またはそれ〔「たましい」〕の或る部分がそう〔「離されうる」〕でないことは、もし〔「たましい」が〕もともと分けられうるものであるならば、不明なことではない。なぜなら〔「たましい」の〕いくらかの部分の「完成態」⁷ *ἐντελέχεια* は〔身体の部分〕自身の〔完成態〕であるから。しかしながらひとつもソーマ〔身体〕の完成態ではないがゆえに〔「たましい」の〕いくらかのものは〔ソーマ〔身体〕から「離されうる」ことを〕何も妨げない。しかしさらに「たましい」が船の船員のように、そのようにソーマ〔身体〕の「完成態」なのかどうかは明らかではない。」⁸ (DA II.1.413a4-9)

この箇所では、「たましい」または「たましい」の或る部分がソーマから「離されうる」のではないことと、「たましい」のいくらかのものがソーマから「離されうる」ことを何も妨げないことが、共に示されている。なお、この箇所の最後の、「たましい」のあり方が船の船員のようにであるかどうかについては、以後の近代までいたる長い論争があった⁹。

この T1.の箇所については、その「完成態」という用語の観点から、「第一の完成態」という表現の登場する、以下の『「たましい」について』第2巻第1章の「たましい」の一連の定義の箇所を参照することができるだろう。

「したがって必然的に、「たましい」とは可能力¹⁰において「いのち」をもつ自然的

⁷ 近年では、「終局態」(桑子.1999, pp.12-13)、「完成現実態」(千葉.2002, p.336)、「終局実現状態」(中畑.2014, p.66)とも訳される *ἐντελέχεια* を「テロス(終わり/目的/完成)のうちにあること」「目的を達成して完成していること」と理解して、本稿では「完成態」と訳すこととする。

⁸ ὅτι μὲν οὖν οὐκ ἔστιν ἡ ψυχὴ χωριστὴ τοῦ σώματος, ἢ μέρη τινὰ αὐτῆς, εἰ μεριστὴ πέφυκεν, οὐκ ἄδηλον. ἐνίων γὰρ ἡ ἐντελέχεια τῶν μερῶν ἐστὶν αὐτῶν. οὐ μὴν ἀλλ' ἕνιά γε οὐθὲν κωλύει, διὰ τὸ μηθενὸς εἶναι σώματος ἐντελεχείας. ἔτι δὲ ἄδηλον εἰ οὕτως ἐντελέχεια τοῦ σώματος ἢ ψυχῆ ὡσπερ πλωτὴρ πλοίου.

⁹ 神崎.2008, pp.173-212, 参照。

¹⁰ 通常、「可能態」と訳されてきた *δύναμις* であるが、原義である「力」という意味合いが欠けてきたことを考慮して、一貫して「可能力」と訳すこととした。すなわちアリストテレスが言及している、「力」、「力量」、「権力」、「能力」、「能」、「有能」、「才能」、「性能」、「可能」などの *δύναμις* の種々の意味に配慮して訳す必要があると思われるので、これらの多様な意味を一語で表現することを考慮した。この *δύναμις* という用語は、「完成態」*ἐντελέχεια* (注7参照)や「実働態」*ἐνέργεια* (注19参照)などのようなアリストテレスによる造語ではなく、日常語にもある、意味の広い言葉である。なお、この「たましい」の定義の箇所の *δυνάμει* については、千葉.2002, pp.346-351 は「生成の可能性」ではなく「存在の可能

ソーマ〔物体〕¹¹の、エイドス¹² *εἶδος* としての実有¹³ *οὐσία* である」¹⁴ (*DA II.1.412 a19-21*)

「それゆえ「たましい」は「可能性において「いのち」を持つ自然的なソーマ〔物体〕の第一の〔最初の／第一次の／第一段階の〕完成態 *ἐντελέχεια ἢ πρώτη* である。」¹⁵ (*DA II.1.412a27-28*)

「したがって「たましい」のすべてについて何か共通のものを言わなければならないとすれば「道具〔器官〕をそなえた自然的なソーマ〔物体〕の *σώματος φυσικοῦ ὀργανικοῦ* 第一の完成態」ということになるだろう。」¹⁶ (*DA II.1.412b4-6*)

この一連の定義については、「たましい」と「道具〔器官〕をそなえた自然的なソーマ〔物体〕」が一体となっていることが明確に示されている箇所のひとつとして、指摘することができるだろう。

- T2. 「だがヌース、すなわち観究める能力〔力／能力〕 *τῆς θεωρητικῆς δυνάμεως* についてはまだ何ひとつ明らかでない、むしろ「たましい」の他の類であるようだ *ἔοικε ψυχῆς γένος ἕτερον εἶναι*¹⁷。そしてそれだけが離されることが許される *ἐνδέχεται χωρίζεσθαι*、ちょうど永遠なものが消滅的なものから〔離されること〕のように。しかし「たましい」の残りの部分は、これらのことから、或るものたちが言うように、離されうるもの *χωριστά* ではないということとは明らかである。」¹⁸ (*DA II.2.413b24-29*)

性」であるとし、また水地.2002, pp.44-48 は「能力的に」と訳している。

¹¹ この箇所のソーマは「物体」を示していると考えられる。

¹² *εἶδος* についてもまた、例えば「種」や「形相」や「姿」や「ありさま」などと訳し分けるのではなく、「カタカナ語」で一貫して「エイドス」と表記することとする。

¹³ 従来、岩崎.1942 訳、出.1968 訳以来、主に「実体」、ときとして「本質」などと訳し分けられたり、また「主有」(水地.2002, 2004)、「本質存在」(中畑.2013)などの訳語もある *οὐσία* を、本稿では一貫して「実有」と訳すこととする。「ある」*εἰμί* という動詞の分詞形との関連を持つということを翻訳にも活かした方がよい、と判断した。なお「実有」は漢音で「じつゆう」と読むこととする。仏教用語で同じ漢字を使い、呉音で「じつう」と読むことと区別するためである。

¹⁴ *ἀναγκαῖον ἄρα τὴν ψυχὴν οὐσίαν εἶναι ὡς εἶδος σώματος φυσικοῦ δυνάμει ζῶν ἔχοντος.*

¹⁵ *διὸ ἡ ψυχὴ ἐστὶν ἐντελέχεια ἢ πρώτη σώματος φυσικοῦ δυνάμει ζῶν ἔχοντος.*

¹⁶ *εἰ δὲ τι κοινὸν ἐπὶ πάσης ψυχῆς δεῖ λέγειν, εἴη ἂν ἐντελέχεια ἢ πρώτη σώματος φυσικοῦ ὀργανικοῦ.* なお、「第一の完成態」とはいわば「知識の使用」に対する「知識の所有」の状態であると考えられる。

¹⁷ 角田.1994, は「理性は靈魂とは別の類であるように見える (*ἔοικε ψυχῆς γένος ἕτερον εἶναι*)」と訳しており、その注で「*DA II.1.413b25-26. γένος ἕτερον* の読みはこの他に「靈魂の何か別の類」も可能であり、岩波全集山本光雄訳はこうしている。しかし Hicks に従ってこれと違えて訳出した。Hicks: op. cit. S. 326.」(p.212.注(94))と記している。ヌースと「たましい」の関係は、一筋縄では行かないことを示してもいる。

¹⁸ *περὶ δὲ τοῦ νοῦ καὶ τῆς θεωρητικῆς δυνάμεως οὐδὲν πω φανερόν, ἀλλ' ἔοικε ψυχῆς γένος ἕτερον εἶναι, καὶ τοῦτο μόνον ἐνδέχεται χωρίζεσθαι, καθάπερ τὸ αἰδιον τοῦ φθαρτοῦ. τὰ δὲ λοιπὰ μόρια τῆς ψυχῆς φανερόν ἐκ τούτων ὅτι οὐκ ἔστι χωριστά, καθάπερ τινὲς φασιν.*

この箇所では「ヌース」以外の「たましい」の「残りの部分」が「離されえない」、ということが説かれている。すなわち「たましい」にかかわるすべてが「離されうる」わけではなく、「ヌース」が「離されることが許される」ことが明記されている（この箇所では許容様相が示されているようにも読めると思われる）。

T3. 「ヌースのみが〔精液の〕外から入ってくることで、そしてそれのみが神的であることが実に残される。なぜなら、ソーマ的な〔身体的な〕実働態¹⁹はそれの〔ヌースの〕実働態と何も共通しないからである。」²⁰ (GA II.3.736b27-28)

T4. 「しかしヌースはなにか実有であるもので〔わたしたちの〕うちに生じ、そして減びることはないようだ。」²¹ (DA I.4.408b18-19)

これらの T3、T4 の箇所では、「ヌース」が「ソーマ」〔身体〕とはかかわらずに、独立に存在する、という側面が、発生論的な側面からも指摘されている、と理解できる。

2

次に「第一の哲学」とのかかわりについて考察してみよう。

T5. 「だが第一の哲学者が、〔素材から〕離され終わっているもの *κεχωρισμένα* として〔限定のない諸様態について取り扱うの〕だ。」²² (DA I.1.403b15-16.)

「第一の哲学者」とは「第一の哲学」の探求にかかわる者という意味である。ということは、例えば『形而上学』Z 卷 11 章に典型的に示されているように、「第二の哲学」が自然学であるとする (Met. Z.11.1037a14-16)、自然学者は本来の「離され終わっているものとして」取り扱う者ではないことにもなる。ここでは「離され終わっているもの」の現在完了形に注意すべきである。この点から考えると「第一の哲学」は「離される」ことが完了したところに成立するものであることが示唆される。この点に関連して、

¹⁹ 従来、しばしば「現実態」または「活動」と訳し分けられ、また「純粹「現実態」」、「現実活動態」、さらに「実現態」(桑子.1993, pp.100-102)とされることもあった *ἐνέργεια* を本稿では訳し分けずに、「働き」のうちにあること」という言葉の原義を響かせて、一貫して「実働態」と訳す。なお、本稿との関連ではアリストテレスが「第一の完成態 *ἐντελέχεια*」という言い方はしているが、「第一の実働態 *ἐνέργεια*」という言い方はしていない点にも着目してもよいだろう。

²⁰ *λείπεται δὴ τὸν νοῦν θύραθεν ἐπεισεῖναι καὶ θεῖον εἶναι μόνον· οὐθὲν γὰρ αὐτοῦ τῆ ἐνεργείᾳ κοινωνεῖ <ή> σωματικῆ ἐνέργεια.*

²¹ *ὁ νοῦς ἔοικεν ἐγγίνεσθαι οὐσία τις οὐσα, καὶ οὐ φθείρεσθαι.*

²² *ἢ δὲ κεχωρισμένα, ὁ πρῶτος φιλόσοφος.*

『ニコマコス倫理学』第10巻第8章の〔「かたち」と素材の〕結合体の徳が人間的な徳であるのに対し、「しかし、ヌースの〔徳〕は離され終わっている *κεχωρισμένη*」²³ (EN X.8.1178a22) という箇所が現在完了の分詞表現で、この箇所とよく似た類似表現であったこととの関連にも着目すべきであろう。ヌースが「第一の哲学」の中心課題であることが示唆されているとも思われる。

「第一の哲学」については、以下のような箇所の言及も参照できるだろう。

「だが「離されうるもの」がどのようなものであるかまた「何であるか」、定めることは第一の哲学の働き〔仕事〕 *ἔργον* だ。」²⁴ (*Phys.* II 2.194b14-15)

「だが第一の〔哲学〕はまた「離されうるものども」 *χωριστὰ* そして「動かされえないものども」²⁵ *ἀκίνητα* についてだ。」²⁶ (*Met.* E.1.1026a15-16)

T6. 「そしてこのヌースも、離されうるし、〔作用を〕受けず、混じり気がなく、実有〔本質〕において実働態であるものである。」²⁷ (*DA* III.5.430a17-18)

T7. 「しかし〔ヌースは〕離された時、それがまさにあるところのものだけであり、そしてただそれだけが不死で永遠である（しかし我々は記憶がないのは、それ〔ヌース〕が〔作用を〕受けず、〔作用を〕受けうるヌースは消滅しうるから）。そしてそれ〔ヌース〕がなくては何ものも覚知しない²⁸ *οὐθὲν νοεῖ*。」²⁹ (*DA* III.5.430a22-25)

これらの T6、T7 の箇所ではヌースが「離されうる」し、「〔作用を〕受けない」ことが示されている。また、ヌースとは区別された「〔作用を〕受けうるヌース」が「消滅し

²³ ἡ δὲ τοῦ νοῦ κεχωρισμένη·

²⁴ πῶς δ' ἔχει τὸ χωριστὸν καὶ τί ἐστὶ, φιλοσοφίας ἔργον διορίσαι τῆς πρώτης.

²⁵ 例えば通常、「不動の動者」と訳されている、*κινῶν ἀκίνητον* を能動、受動に注意して訳すと、*κινῶν* は「動者」といっても、能動の「動かすもの」を意味しているし、また *ἀκίνητον* は「不動の」といっても受動の「動かされない」、または、語尾の *-τόν* の部分に配慮して、受動的な可能性と理解して「動かされえない」という意味である。以上の事情を踏まえてこの語を「漢語」で正確に訳そうとすると「不被动の起動者」、または「不可被动の起動者」ということにもなるわけである。もしもこれらを「不動の動者」という訳語と比較して生硬な表現だと感ずるようなら、細かいニュアンスを犠牲にして「不動の動者」という従来からの訳語を採用するか、あるいは「やまとことば」を基礎にして、能動、受動、可能などのニュアンスも正確に表現して、「動かされずに動かすもの」、または「動かされえずに動かすもの」といった訳語を採用する余地がないかどうか検討してみた結果、*ἀκίνητον* を「動かされえない」と訳し、*ἀκίνητα* を「動かされえないものども」と訳してもよいと思われる。

²⁶ ἡ δὲ πρώτη καὶ περὶ χωριστὰ καὶ ἀκίνητα.

²⁷ καὶ οὗτος ὁ νοῦς χωριστὸς καὶ ἀπαθὴς καὶ ἀμυγής, τῇ οὐσίᾳ ὦν ἐνέργεια.

²⁸ 「思惟する」、「知性認識する」、「直知する」などと訳されてきた *νοεῖν* をできるだけ多様な意味を兼ねることを考慮して、特に推論知と直接知または無分別知の両者を含むことを踏まえて、「覚知する」と訳すこととした。名詞形の *νοῦς* についての注 6 も参照。

²⁹ *χωρισθεὶς δ' ἐστὶ μόνον τοῦθ' ὅπερ ἐστὶ, καὶ τοῦτο μόνον ἀθάνατον καὶ αἰδίων. οὐ μνημονεύομεν δὲ, ὅτι τοῦτο μὲν ἀπαθὴς, ὁ δὲ παθητικὸς νοῦς φθαρτός, καὶ ἄνευ τούτου οὐθὲν νοεῖ.*

うる」という点は、後世のいわゆる「能動理性」と「受動理性」の区別の議論のきっかけともなった重要な論点である。

T8. 「だが、後にもまたなにか残り留まらないかどうか *εἰ δὲ καὶ ὑστερόν τι ὑπομένει*、探求すべきである。なぜなら、若干のものについては、〔残り留まるのを〕なにも妨げないからである、例えば「たましい」がそのようなものかどうか、すべての〔「たましい」〕がではなく、そうではなくヌースが。なぜなら、おそらくすべての〔「たましい」〕が、〔残り留まるの〕は不可能だから。」³⁰ (*Met. A.3.1070a24-26*.)

ここでは「たましい」が「離されうる」かどうかではなく、「残り留まる」かどうかが問題とされている。これは「離されうる」ことの別の側面である。そしてもしも「たましい」が「残り留まること」が「たましい」が「死後も残り留まること」と解釈できるのであれば、問題は「死後の「たましい」の不死」の問題とつながることとなる。

3

次に、「ロゴスに沿って離されうるエイドス」という側面に着目してみよう。

T9. 「自然はそれ自らのうちに「動き」³¹の始源を持つものどもの「かたち」³² *μορφή* でありエイドスであるだろう、〔端的に〕「離されうる」ものであるのではなく、ロゴス³³に沿って〔「離され」うるもの〕だが」³⁴ (*Phys. II.1.193b3-5*)

T10. 「だが、感覚的な実有はすべて素材³⁵をもっている。ところで、「基に置かれた

³⁰ *εἰ δὲ καὶ ὑστερόν τι ὑπομένει, σκεπτόν· ἐπ' ἐνίων γὰρ οὐδὲν κωλύει, οἷον εἰ ἡ ψυχὴ τοιοῦτον, μὴ πᾶσα ἀλλ' ὁ νοῦς· πᾶσαν γὰρ ἀδύνατον ἴσως.*

³¹ 一般に「運動」と訳されることの多い *κίνησις* を、そのギリシア語における意味の多様さに鑑みて、広い意味を持つ日本語の「動き」と訳すこととした。

³² 「形態」、「形式」などとも訳される *μορφή* を、日常語の幅広い意味も背景にした上での用語と解釈し、本稿では一貫して「かたち」と訳す。

³³ 言説、説明方式(出.1968)、説明言表(千葉.2002)、理論、理性、理由、割合、概念(岩崎.1942)、概念規定、本質規定(牛田.1994)、説明規定(中畑.2013)など、多様な意味合いとともに、様々に訳されてきた *λόγος* は、例えば「やまとことば」の「ことわり」という言葉ではやや漠然とした意味しか表せない、と判断して、カタカナ語でロゴスと表現することとした。

³⁴ *ἡ φύσις ἂν εἴη τῶν ἐχόντων ἐν αὐτοῖς κινήσεως ἀρχὴν ἢ μορφήν καὶ τὸ εἶδος, οὐ χωριστὸν ὄν ἀλλ' ἢ κατὰ τὸν λόγον.*

³⁵ 多くの場合に「質料」と訳されている *ύλη* についても、本稿では、専門用語としての役割と日常語の両義を持っている、という側面と、「森」「材木」「材料」といったこの言葉の持つ原義を活かした場合に漢語の「材」という要素を訳語にも含めたほうがよい、という側面、および「質量」という自然科学用語の同音異義語が存在すること、などから判断して、一貫して「素材」と訳すことにする。

もの」³⁶は実有であるが、或る意味では素材が〔「基に置かれたもの」である〕（私は素材を、実働態においては「なにかこれ」³⁷であるものではないが、可能性においては「なにかこれ」であるところのもの、と言う）。また或る意味では、ロゴスまたは「かたち」が〔「基に置かれたもの」である〕、それは「なにかこれ」であるものだが、ロゴスにおいては「離されうる」ところのものである *ὁ τόδε τι ὄν τῷ λόγῳ χωριστόν ἐστίν*）。そして第三の意味では、「両者から成るもの」が〔「基に置かれたもの」である〕、そのみに生成または消滅があり、そして端的に「離されうる」。なぜならば、ロゴスに沿っての実有のうちでも或るもの³⁸はそう〔端的に「離されうる」〕であるが、他のものはそう〔端的に「離されうる」〕ではないからである。³⁹ (*Met. H.1.1042a24-31*)

このT9やT10の箇所のように「ロゴスに沿って「離されうる」という論点であれば、エイダスでもある「たましい」のほとんどが当てはまることに、ほぼ問題はないだろう⁴⁰。そしてまた、ヌースの場合こそが「端的に「離されうる」という論点に当てはまる、という点も明確になるだろう。

そして、ここまで検討してきた論点は、『ニコマコス倫理学』第10巻などでのヌース

³⁶ 古来、「基体」(substratum, substrate)、「主語」(subjectum, subject)と訳し分けられ、また「先言措定」(井上忠.1980, 特に pp.146-164)、との訳語もある *ὑποκείμενον* を、本稿では言葉の原義に戻って「基に置かれたもの」と訳す。

³⁷ 「このもの」、「或るこれ」、「この何か」などと訳されてきた *τόδε τι* を本稿では「なにかこれ」と訳した。この用語についてはもしも *τόδε* を名詞的に、*τι* を形容詞的に（英語の場合の不定冠詞のように）把握するなら、「或るこれ」という訳語が、また、*τι* を名詞的に、*τόδε* を形容詞的に把握するなら、「この何か」という訳語が妥当することになると思われる。しかし片方だけを名詞的に、残りの一方を形容詞的に把握するのではなく、Smith[1921]p.19の指摘するように *τόδε* も *τι* も両者とも名詞と把握して並位的に考え、あえて訳せば「これ・なにか」と理解することも言語的な分析からは可能であるし、この選択肢を追求する余地もあるように思われる。内容的な観点からは、仮に両者とも名詞とした場合、*τι*（「なにか」）が「実有」に所属するものも、「実有」以外のカテゴリーに所属するものも、両方とも示せるのに対して、*τόδε*（「これ」）は通常「実有」しか示さないし、また *τόδε τι* の形ではなく *τόδε* だけでもカテゴリーとしての「実有」を示せる場合がある (cf. *Met. Z7.1032a15*) ので、その意味で *τι* が省略される場合もある（つまり *τόδε (τι)* と理解できる）、というのがアリストテレスに特徴的な用語法なので、言語的分析の観点から並位的に把握したとしても、重点は、すべてのカテゴリーに当てはまる *τι* の方ではなく、「実有」のみに当てはまる *τόδε* の方にあると思われる。

³⁸ 出.1968, p271.では「理性」が実例として挙げられ（「たとえば理性のごとき」）、また、Bostock.1994, p.251.では‘the unmoved mover(s) of the universe’が実例として挙げられている（“The exceptional forms that are genuinely separable are presumably the unmoved mover(s) of the universe”.）。

³⁹ *αἱ δ' αἰσθητὰ οὐσίαι πᾶσαι ὕλην ἔχουσιν. ἔστι δ' οὐσία τὸ ὑποκείμενον, ἄλλως μὲν ἢ ὕλη (ὕλην δὲ λέγω ἢ μὴ τόδε τι οὐσα ἐνεργεῖα δυνάμει ἐστὶ τόδε τι), ἄλλως δ' ὁ λόγος καὶ ἡ μορφή, ὃ τόδε τι ὄν τῷ λόγῳ χωριστόν ἐστιν· τρίτον δὲ τὸ ἐκ τούτων, οὗ γένεσις μόνου καὶ φθορά ἐστὶ, καὶ χωριστόν ἀπλῶς· τῶν γὰρ κατὰ τὸν λόγον οὐσιῶν αἱ μὲν αἱ δ' οὐ.*

⁴⁰ この場合でも Charles.2009 の理解では、例えば「怒り」が「心臓周辺の血液の沸騰」から「ロゴスに沿って」も「離されうる」ことにはならない、ということになる。

こそが「それぞれの人」なのである、との以下の T11、T12 の議論などとも密接にかかわることとなるだろう。

T11 「さらに、抑制があるとか抑制がないとかは、ヌースが統制することにおいてか否かで言われる、それぞれの人がそれ〔ヌース〕であるからである。」⁴¹ (EN IX8.1168 b34-35)

T12 「そしてそれ〔ヌース〕がまたそれぞれの人であると思われよう、それ〔ヌース〕が支配的なものであり、そしてより善いものだとすれば。」⁴² (EN X7.1178a2-3)

ヌースこそが「それぞれの人」なのである、との表明は、「第一の哲学」の中心課題がヌースであるとしたなら、まさに整合性のある考察ということになるだろう。

そしてこの T11、T12 の議論は、以下の箇所の表明とも密接にかかわるだろう。

「だが、助言する人々に沿って「人であるからには人の事柄を思慮すること」をすべきでないし「死すべきであるからには死すべきものの事柄を〔思慮すること〕」をすべきでもない、むしろ許されるかぎりに〔自分を〕不死にしなければならない *χρηὴ ἐφ' ὅσον ἐνδέχεται ἀθανατίζειν* そして自身のうちの最善のものに沿って生きることへ向かってすべてのことどもをおこなわなければならない。」⁴³ (EN X7.1177b31-34)

結論

以上の検討から、「たましい」が「離されうること」をめぐっては、このテーマの分野にかかわる問題と、テーマの範囲の限定にかかわる問題があることがあることが明らかになったと思われる。これらの点を明確にしないと、一方では「たましい」とソーマ〔身体〕が一つであると言い、他方では、「たましい」の部分とも他の類とも考えられるヌースが、ソーマ〔身体〕から独立して存在できる、とも言い、相互に矛盾した見解が混在しているのではないか、という議論が錯綜することとなる。

まず、テーマの分野にかかわる問題であるが、本稿で明らかにしたように、アリストテレスは、各箇所において、「第一の哲学」の課題が、自然学に相当する「第二の哲学」の課題とは峻別される、という趣旨のことを繰り返し述べている。ソーマ〔身体〕とかかわる「たましい」の考察は、基本的に「第二の哲学」の課題であり、『「たましい」について』

⁴¹ καὶ ἐγκρατῆς δὲ καὶ ἀκρατῆς λέγεται τῷ κρατεῖν τὸν νοῦν ἢ μὴ, ὡς τούτου ἐκάστου ὄντος·

⁴² δόξειε δ' ἂν καὶ εἶναι ἕκαστος τοῦτο, εἴπερ τὸ κύριον καὶ ἄμεινον.

⁴³ οὐ χρὴ δὲ κατὰ τοὺς παρανοῦτας ἀνθρώπων φρονεῖν ἀνθρώπων ὄντα οὐδὲ θνητὰ τὸν θνητὸν, ἀλλ' ἐφ' ὅσον ἐνδέχεται ἀθανατίζειν καὶ πάντα ποιεῖν πρὸς τὸ ζῆν κατὰ τὸ κράτιστον τῶν ἐν αὐτῷ·

第2巻第1章の「たましい」の定義に関する論述も、生物の「いのち」の源」としての「たましい」を、植物から人間までに共通した特色によって一般的にまとめたものと捉えることができ、いわば「第二の哲学」としての自然学の分野においてできうる限り「たましい」を定義したものと考えることができる。それは、自然の研究者が、ただ単に素材としての感覚的実有を認識するのみではなく、ロゴスに沿っての実有をも認識すべきであり、いな、これをこそいっそうよく認識すべきである(*Met.Z.11.1037a10-17*)という、『形而上学』Z巻11章と基本姿勢を共有する研究態度であると言える。

他方でヌースにかかわる論点を考える際には、上述の「第二の哲学」での探求態度とは、予想以上に峻別された構えが求められることが、各テキストの読みからは示唆される。「ひとつもソーマ〔身体〕の完成態ではないがゆえに〔「たましい」の〕或るものは〔ソーマ〔身体〕から「離されうる」ことを〕何も妨げない。」(*De An. II.1.413a6-7*)という論述の中の「或るもの」がヌースを示していることはほぼ間違いない。ヌースは「第一の哲学」の領域ではソーマ〔身体〕とはかかわらずに、独立に存在するのである。この点は以下の『動物発生論』第2巻第3章(*GA II.3.736b27-28*)の「ヌースのみが外から入ってくること、そしてそのみが神的であることが実に残される。なぜなら、ソーマ的な〔身体的な〕実働態はそれの〔ヌースの〕実働態と何も共通しないからである。」という叙述などで、発生論的な側面からも指摘されていた。

そしてこの点は、『ニコマコス倫理学』第10巻などでの「ヌース」こそが「それぞれの人」なのである、との議論の理解をも深めるものであると思われる。第10巻第8章の〔「かたち」と素材の〕結合体の徳が人間的な徳であるのに対し、「しかし、ヌースの〔徳〕は離され終わっている *κεχωρισμένη*」(*EN X8.1178a22*)という箇所が現在完了の分詞表現であったことも思い起こすべきであろう。「第一の哲学」は「離される」ことが完了したところに成立するものであることが示唆されるし、また「離され終わっている」ものとしての「ヌース」がまさに「第一の哲学」の中心課題であることも示唆されていたのである。

通常、現存する *Corpus Aristotericum* の中では「第一の哲学」にかかわるテーマを最も論じていると考えられる、『形而上学』Λ巻での議論の中心課題であったのが「ヌース」であった点も、本稿での考察との親和性を示すことともなるだろう⁴⁴。

テーマの範囲の限定にかかわる問題があることについては、例えば「端的に「離されうる」こと」と「ロゴスにおいて「離されうる」こと」は異なるので、どちらの場合が問題になっているのかを明確にする必要がある。問題の「たましい」はどちらの場合にもかかわっている。また、「端的に「離されうる」こと」の場合でも、「たましい」が「離されうる」こと」と、「ヌース」が「離されうる」こと」と「〔作用を〕受けないヌース」が「離されうる」こと」とでは、限定されるものの範囲が異なる。アリストテレスは場合によって以上すべてについて論じているので、現在の話題がどのレベルの厳密さを要求する

⁴⁴『形而上学』Λ巻と、関連する「第一の実有」をめぐる諸問題の考察については、伊藤.1994を参照。

ものであるのかを理解して、それぞれのテキストを読解する必要にも迫られることとなる。もしも「端的に「離されうる」こと」が「たましい」について問題になった場合は、それは伝統的な「「たましい」の不死」の当否の問題ともなるだろうし、また「「〔作用を〕受けないヌース」が「離されうる」こと」が問題になった場合には、後代におけるいわゆる「普遍的な理性」の永遠性が「個人の「たましい」」の救済につながるかどうか、といった問題の端緒ともなるだろう⁴⁵。おそらく、結合体を構成する素材から端的に「離されうる」のは、厳密には「作用を受けないヌース」のみとなり、自然的実有のうちでも、「いのち」のない実有（単純物体、石、山など）、「いのち」の源（「たましい」）があっても栄養摂取などのいわゆる植物魂のみを持つ実有（植物）、感覚などのいわゆる動物魂までしか持たない実有（動物）の「たましい」は「離されうる」ことはできず、人の場合でも、植物魂の部分や動物魂の部分、さらには「〔作用を〕受けるヌース」の部分までも、厳密には「離されうる」ことはできないことになるだろう。しかし「厳密」でない場合にはおそらく議論の展開は以上とは異なったものになるだろうし、またこの場合は「たましい」が「ヌース」ともかかわっている、しかも、「〔作用を〕受けないヌース」ともかかわっている、とする解釈なども検討の余地がある⁴⁶。ちなみに「「〔作用を〕受けるヌース」については『「たましい」について』第3巻第5章（DA III.5.430a22-25）でのみ限定的に言及されている事柄である。そしてそれは、この箇所ではまさに「たましい」を持つ生物としての「人のヌース」が問題になるからであるとも考えられる。「神のヌース」の場合はこの問題は生じない、とも言えるだろうし、その意味ではこの「「〔作用を〕受けるヌース」の問題は本来「第二の哲学」の課題であって、「第一の哲学」の本来の課題ではない、とも言えるかもしれない。

さらにはこれらの箇所では、多くの場合、疑問文が用いられており、平叙文での断定もなされてはおらず、内容的に柔軟な思索が行われている途上にあると思われることも、十分に考慮に入れる必要がある。

いずれにせよ本稿での以上までの考察が妥当だとすると、「第一の哲学」の内実についても、これらの考察に沿った事態をどのように把握すべきかを、どこまでも「高み」へ向かう姿勢とともに、考えざるをえなくなるだろう。

アリストテレス参照著作略号

『自然学』 (<i>Physica</i>)	<i>Phys.</i>
『「たましい」について』 (<i>De anima</i>)	<i>DA</i>

⁴⁵ 近年の関連邦語文献としては、井上淳.2015 が挙げられる。

⁴⁶ 『形而上学』Z巻10章や11章で「第一の実有」として、また「内にあるエイドス」として、「たましい」が重要な役割を果たす、という点については伊藤.2006を参照。この箇所での「たましい」については、本稿で検討したような、ヌースや「第一の哲学」とのかかわりについても、十分に考慮して考察する必要があるだろう。

『動物の発生について』 (<i>De generatione animalium</i>)	GA
『形而上学』 (<i>Metaphysica</i>)	Met.
『ニコマコス倫理学』 (<i>Ethica Nicomachea</i>)	EN

なお、本稿における Bekker 版のページの行数は各底本ではなく、オリジナル1831年版の復刻版（参考文献、参照）による。

参考文献

- Aristotelis opera ex recensione Immanuelis Bekkeri; edidit Academia Regia Borussica.- Editio altera quam curavit Olof Gigon. - Berolini: Apud W. de Gruyter 1960-1961. (オリジナル1831年版の復刻版)
- Barnes, J.1971, 'Aristotle's Concept of Mind', *Proceedings of the Aristotelian Society*, 72, pp.101-114.
(バーンズJ.著／高橋久一郎訳・解題, 1986, 「アリストテレスの心の概念」, 『ギリシア哲学の最前線Ⅱ』, 東京大学出版会, 1986, pp.58-85.)
- Bostock, D.1994, *ARISTOTLE Metaphysics BOOKS Z AND H*, Oxford.
- Burnyeat, M. 1992, "Is an Aristotelian philosophy of mind still credible? A draft" *Essays on Aristotle's "De anima"*, 1992, pp.15-26.
- Bywater, I.1894, *Ethica Nicomachea*, Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press. (『ニコマコス倫理学』からの原文引用, 翻訳の底本)
- Caston, V.2009, 'Commentary on Charles', *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* X X IV, pp.30-49.
- Charles, D.2009, 'Aristotle's psychological theory', *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* X X IV, pp.1-29.
- Drossaart Lulofs.1965, *De generatione animalium*, Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press. (『動物の発生について』からの原文引用, 翻訳の底本)
- Hicks, R.D.1907, *Aristotle De Anima*. Cambridge: Cambridge University Press. (『「たましい」について』からの原文引用, 翻訳の底本)
- Jaeger, W.1957, *Metaphysica*, Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press. (『形而上学』からの原文引用, 翻訳の底本)
- Nussbaum, M.C. and Rorty, A.O. eds.1992, *Essays on Aristotle's "De anima"*, Oxford: Clarendon Press.
- Rackham, H. 1934, 'Aristotle :The Nicomachean Ethics' Loeb Classical Library, London.
- Ross, W.D. 1924, *Aristotle's Metaphysics, a revised Text with Introduction and Commentary*, vols. I , II , Oxford.
- . 1936, *Aristotle's Physics, a revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford. (『自然学』からの原文引用, 翻訳の底本)

- . 1956, *Aristotle's De anima*, (Oxford Classical Text). Oxford.
- Shields, C.1990, “The first functionalist”, *Historical foundations of cognitive science*, pp.19-33.
- Smith, J.A.1921, ‘TOΔE TI in Aristotle’, *The Classical Review*, 35, p.19.
- Sorabji, R.1992, “Intentionality and physiological processes: Aristotle’s theory of sense-perception”, *Essays on Aristotle’s “De anima”*, pp.195-225.
- 出隆.1967, 『ギリシア人の靈魂觀と人間学』, 勁草書房
- ／訳註.1968, 『形而上学』(『アリストテレス全集12』), 岩波書店.
- 伊藤克巳.1994, 「アリストテレスにおける「不動の原理」と「第一の実体」」, 『西洋古典学研究』 XL II, pp.57-66.
- .2006, 「『形而上学』 Z 卷における「第一の実有」としての「エイダス」の解釈について」, 『西洋古典研究会論集』 第15号, pp.33-77.
- 井上淳.2015, 「「人間の魂は存在的に身体から分離しているのであるか」 —トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』 第2 問題について—」 『南山神学』 38号, pp.145-187.
- 井上忠.1980, 『哲学の現場—アリストテレスよ語れ』, 勁草書房.
- 今道友信.2004, 『アリストテレス』, 講談社(講談社学術文庫).
- 岩崎勉／訳註.1994(1942初版), 『形而上学』, 講談社(講談社学術文庫).
- 牛田徳子.1991, 『アリストテレス哲学の研究—その基礎概念をめぐる』, 創文社.
- 角田幸彦.1994, 『アリストテレスにおける神と理性』, 東信堂.
- 神崎繁.2008, 『魂(アニマ)への態度—古代から現代まで』, 岩波書店(双書哲学塾)
- 桑子敏雄.1993, 『エネルゲイア』, 東京大学出版会.
- .1999, 『アリストテレス 心とは何か』, 講談社(講談社学術文庫1363).
- 千葉恵.2002, 『アリストテレスと形而上学の可能性』, 勁草書房.
- 茶谷直人.2012, 「アリストテレス心身論における心物相即説(psycho-physical interpretation)をめぐる」, 『神戸大学文学部紀要』 39, pp.1-17.
- 中畑正志.2001, 「アリストテレス 魂について」, 京都大学学術出版会.
- .2013, 「カテゴリー論」『カテゴリー論・命題論』新版アリストテレス全集第1 卷, 岩波書店, pp.1-102(解説, pp.269-295).
- .2014, 「魂について」『魂について・自然学小論集』新版アリストテレス全集第7 卷, 岩波書店, pp.1-189(解説, pp.475-504).
- 水地宗明.2002, 『アリストテレス『デ・アニマ』注解』, 晃洋書房.
- .2004, 『アリストテレスの神論』, 晃洋書房.
- ムンクヨンナミ
文景楠.2016, 「説明理論としての質料形相論」, 博士論文.
- 山本光雄.1968, 「靈魂論」『靈魂論・自然学小論集・氣息について』アリストテレス全集第6 卷, 岩波書店, pp.1-141(解説, pp.143-163).

<後記>

本稿は、2018年9月9日に国士館大学で開催された第20回ギリシア哲学セミナーで発表された原稿を基に、加筆、修正を施したものです。当日の発表では、参加した多くの方々からの貴重なご質問、ご意見をいただき、ありがとうございました。また、「「たましい」が離されうること」というテーマを、第一の哲学と第二の哲学とのかかわりから考察する、という論点は、アリストテレス哲学全体の理解の根幹にかかわる、という思いを、発表を通して深めましたので、今後、さらなる考察へと進む励みともなりました。今回の発表に関係したすべての皆様方に、感謝いたします。